ヤングケアラーの食事に関する負担と仲間と食事を共にすることの意義

―イギリスにおけるヤングケアラーの居場所・夕食提供サービスの効果に着目して―

○　氏名　田幸恵美（72585）

［キーワード］　ヤングケアラー、　食事、　イギリス

1. 研 究 目 的

イギリスでは、コロナ禍以降、家族を介護する成人が全体の約2割に増加した。ヤングケアラー（以下、YCと略す）についても、支援が中断し、家族の心身状態が悪化する等負担が増えたと報告され、YCとその家族の複雑なニーズに合った支援の充実が求められている。ロンドンのA団体は、地域のYCに様々な支援やイベントを企画・提供し、特に中高生グループには10年近い間、居場所と食事を提供してきた。本報告は、報告者がボランティアとして出会ったYC達が語る「食事に関する負担」と「仲間と集い、食事を共にすることの意義」を知ることで、有効なYC支援策検討に示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

A団体は、12～16歳のYCが週一回自由に集まり、活動や自由遊びの後、手作りの夕飯を共にする2時間のプログラムを提供している。YCの食に関する負担感、及び仲間と食事を共にすることの有用性について実践から知ることで、上記目的2点に視点を置く。

1）質問紙調査：2023年1月～3月の期間でプログラムに参加したYCに、グーグルフォームを使用し、その場で配布、回収。選択式及び自由回答とし、記述統計にて分析した．対象者約60名の内、回答者は32名で、その内26名(81.2%)がグループに5回以上参加。

2）インタビュー調査：質問紙調査の中で希望を表明した7名を対象に、半構造化インタビューの結果の元、質的記述的分析を行った。

3. 倫理的配慮

報告者は研究機関無所属である為、研究倫理審査を受けられない。よって「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程」及び「日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」を遵守し、研究を実施した。個人情報保護やインフォームド・コンセントについては、質問紙調査は無記名式とし、書面冒頭で目的を説明、回答をもって同意を得たとみなした。インタビュー調査は、事前にA団体から保護者に趣旨と個人情報取扱について伝えて貰い、面接冒頭にYCに改めて説明した。本発表に関連し開示するCOIはない。

4. 研 究 結 果

(1) 家庭における食事に関する負担

1）質問紙調査結果：　24名(75.0%)が家族や自分の為に食事を作ると答え、5名は自分で毎日食事を作ると答えた。「食料が家にあるか心配」と回答したYCは3名（9.4%）いた。

2）インタビュー結果：

「家庭における食事に関する」YCの思いを2つのカテゴリーに分類できた。

①　食事に関する家族（母親）への気遣い「お母さんが（体調が悪くて）何を作ったらいいか分からない時は、自分が食事を作る。」「お腹が空いたら自分で作る。お母さんの邪魔をしたくないから。」「お母さんが疲れて寝ている時は、弟達の為にも食事を作っている。」
②　食料品や金銭的欠如に関する気づき　「時々（お金が）足りない時があって、お母さんがお店で少な目の食料をみんなに買う時はある。」「お母さんがお金がない時は、食品棚とか冷蔵庫から食べる物を探して作る。」

(2) 仲間と集い、食事を共にすることの意義

1) 質問紙調査結果： 計29名(90.7%)のYCは、「楽しい」「とても楽しい」と回答。29名(90.7%)が「助けになる」、2名は「何とも言えない」、1名は無回答であった。

2) インタビュー結果：

「仲間と集い、食を共にすること」に関するYCの思いを3つのカテゴリーに分類できた。

①　仲間との繋がりを深める助けとなる　「仲間が気軽にできる一番の方法。」「一緒に食べることで、仲良くなれる気がする。」「食べながら、今日起きたこととかについて会話ができる。」「自分だけが大変で特別な存在だって思わなくていい。」
②　食事の質・種類が豊富にあることへの喜びと発見　「食事の種類がある。」「買ってきた物でなく、食事を作ってくれるのが嬉しい。」「家では食べない、色々な種類があるのがいい。」「食べなかった物も食べられるようなった。」
③　自分と家族の助けになる　「一日何も食べない人は助かると思う。」「ここがある事で、自分に自由な時間ができる。」「家族が自分の為に食事を作る時間を節約できる。」

5. 考 察

結論として、質問紙調査からは、9割以上が仲間と夕食を共にする事を「楽しい」「助けになる」と評し、多数のYCが支援に満足していると考えられる。食事提供サービスは、①他のYCと繋がりを強める補助となり、②食事の質や種類の豊富さがYCに肯定的な意味を持つこと，③家族や自身の助けになると捉えるYCが多いことが分かった。質問紙調査の自由回答とインタビューからは、同様の悩みを持つ仲間と過ごす場が、YCの安心感に繋がることが窺えた。加えて、親の食に関する負担や経済状況に気づき、家族を思いやるYCの像が浮かんできた。YCが自分の時間を保障され、似た背景を持つ仲間と食事をとる場がある事は、互いの繋がりを深められるだけでなく、食に関する負担を緩和する効果があると考えられる。日本においても具体的なYC支援策が検討され、食事配給等を行う自治体や団体が漸次見られるようになったが、YC達が安心し、自由に仲間と時間を共有できる場、ケアや家事から多少なり解放され、作られた食事が提供される様な支援を拡大させていく必要性がある。この調査の限界としては、回答者がプログラムに参加したYCのみであった為、同様にYC登録し、サービス対象でありながらも、複雑な家族背景や時間的余裕が無い等の理由で参加できないYCの声を反映できなかった点が挙げられる。